

〔書評〕

中村史著『三宝絵本生譚の原型と展開』

平岡 聡

地図や地球儀に国境線は引かれていても、実際の地球に国境線は存在しないように、学問もその内容や研究対象に応じて便宜的に線引きされていても、真理の探究に境界線は存在しない。学問をカテゴライズすることにはそれなりの利点も存在するが、他学問との交渉を妨げるという縦割の弊害も同時に認められ、学問が

細分化・専門化するほど、この傾向は顕著である。しかし、このような各学問間の線引きはあくまで便宜的なものであり、物理的な溝が実際にあるわけではない。今回、中村史が著した『三宝絵本生譚の原型と展開』は学位論文に改稿加筆したものであるが、このような学問の縦割りの壁を横断的に乗り越えた高著と言える。

日本の文化を考える場合、それは中国の影響を色濃く反映しているが、その中国の文化も、その濫觴はインドに遡る場合が多々ある。中国や日本のみならず、アジアの文化を考える場合、インドの影響力は無視できないほど大きいのである。無論、その国に固有な文化もあるが、文化は他文化との接触によって影響を受け

ながら形成されていくダイナミックな現象であるから、余計に縦割りの研究は弊害となる。

『三宝絵』は日本の平安時代に成立した説話集であるから、国文学という学問の研究対象となるべき資料であるが、そこに見られる本生譚の起源がインドの（仏教）説話である以上、それは「仏教学（あるいはインド学）」の研究対象でもある。否、むしろこのような資料こそ「国文学」とか「仏教学（インド学）」といった小さな枠組みで考察されるべきではない資料と言えるが、国文学からこの資料にアプローチすれば、サンスクリットという難解な言語の壁が立ちはだかり、これまで国文学者の侵入を許してこなかったのが実情だ。ところが幸いに、著者は国文学から出発しながらも、サンスクリット等、仏教学で必要とされる語学や仏教学の方法を習得したために、「国文学」と「仏教学」の壁を乗り越えることができたのである。ではその内容を紹介しながら、最後に私見を述べることにしよう。

本書の内容は、その題名の示すとおり、『三宝絵』所収の本生譚（ジャータカ）の原型・起源・展開を研究のテーマとしている。換言すれば、これらの説話にどのようなインド的・仏教的背景があるかを解明したものであり、また各本生譚やその類型話が文学としてどのように読み解けるかを明らかにしている。ここでは、『三宝絵』所収の本生譚のうち、シビ王本生譚、スタソーマ本生譚、そして大施太子本生譚という三つの説話が考察され、それぞれの説話の起源や原型がどこにあり、またそれがどのように展開し、どのような機能を担わされてきたのかを解き明かしている。

第一章（『三宝絵』とその本生譚）における本資料の基礎的情報の提示に続き、第二章と第三章ではシビ王本生譚の原型と展開等が考察されている。『三宝絵』およびインドの仏教説話文献では、これが大乘仏教の実践徳目である六波羅蜜のうち「布施波羅蜜」を主題とする説話であるとされるが、一方でこの説話は「求法」という文脈で説かれることもある。またさらにその起源を遡れば、この説話はヒンドゥー世界において、人民や生物を守護する「王の努め」を説く説話であった可能性を著者は指摘し、「王の努め」を主題とするこの説話の原型が仏教説話文献に取り込まれると、「布施波羅蜜」や「求法」といった、新たな仏教的文脈に嵌め込まれた「ひずみ」によって、新たな話型を誕生させたことを論証している。

つづく第四章・第五章は、スタソーマ本生譚を取り上げている。

る。『三宝絵』および『三宝絵』が下敷きにしたとされる『大智度論』において、この本生譚は、六波羅蜜の一つである「持戒波羅蜜」の例証話という体裁をとっている。しかし、その類型話の比較考察から、スタソーマ本生譚の本来の姿は「持戒波羅蜜」を例証する説話ではなく、この説話は本来「真実語」あるいは「真実の誓い」を背景とする説話であったと指摘する。そして第六章では、古代インドの叙事詩「マハーバーラタ」における「真実語」の用例に基づいて、その思想的背景を考察している。

また第七章は、大施太子本生譚の原型と展開を問題にし、『三宝絵』所収の大施太子本生譚が「普施商主本生譚」と「善友太子本生譚」という二つの説話が融合した内容になっていること、また「布施商主本生譚」は本来「布施」を説く説話であったが、「努め励む」ことを教える「マハージャナカ型」の説話の影響で、その主題が「精進」へとシフトしたことを論証している。

そして次の第八章は、『三宝絵』所収の大施太子本生譚がどのように誕生したかを明らかにする。『三宝絵』所収の大施太子本生譚の前半を形成する「善友太子本生譚」は、「デーヴァダッタの無報恩」を説く根本説一切有部破僧事の説話と深く関わっているが、「善悪の兄弟王子」という重いモチーフをもつ「善友太子本生譚」が、これとよく似た話型の「普施商主本生譚」と結びつくことで「善悪の兄弟王子」というモチーフから解放されたとき、「大施太子本生譚」が誕生したという。同類の説話は『四教義』にも見られるが、その記述は極めて簡素であることから、大

施太子本生譚は『三宝絵』において初めてその完成した姿を現したと著者は指摘する。さらにこの『三宝絵』所収の大施太子本生譚は、単にその説話の終着点というだけではなく、話型と主題の組み合わせという点で、類例のない独自の説話となっている点も併せて指摘している。

以上が本書の概要である。すでに指摘するように、国文学の枠を超え、著者はインド文献にまで遡って類型話を収集し、その内容を丹念に読み込んで本格的に比較考察している点は評価に値する。従来も同様の研究がないわけではなかったが、この種の資料に対する国文学側からのアプローチは、せいぜいその漢訳仏典の出典を明らかにする程度であつたし、またインド仏教学側からも、あるインド起源の説話が日本の文献のどこにあるかを指摘する程度で、考察するとしても断片的なものに留まっていたと言わざるを得ない。

総じて本書は刺激的で独創的な手法に基づくものであつたが、ただ残念だったのは、説話の変容、つまり起源と展開の問題が、インド内部で完結しており、その説話の「日本の変容」が、最後の大施太子本生譚を除けば、見られなかった点である。シビ王本生譚およびスタソーマ本生譚は、いずれも基本的に「大智度論」の説話をベースにしているが、「大智度論」の段階においてすでに二つの説話の展開は終息しており、そこから『三宝絵』に取り込まれる段階ではほとんど変容が認められない。この点で、本書

における著者の手法は、仏教学と国文学の壁を乗り越えたとはいえ、どちらかと言えば、仏教学的な手法に主軸があつたと言えよう。さらには、『三宝絵』が説話を編纂する際の意図や、数ある仏教説話文献から何故その説話が採択されたのかという目的なども（もしあればの話だが）考察の対象となっていれば、『三宝絵』という資料の独自性を考える点からも、さらに重厚な研究となっていたと考えられる。

無論、これは著者のせいではなく、取り上げた文献がたまたまそうであつたというだけである。その意味では、最後に取り上げられた大施太子本生譚は、『四教義』に同類の話が認められるとはいえ、その内容や話型と主題の組み合わせという点で『三宝絵』独自の展開を見せているため、そこから導かれる結論は極めて興味深い。だから、著者はこの説話を本書の最後に布置したのである。これは取り上げる資料の性格如何に大きく関わることはあるが、インドに端を発し中国を経由して日本に伝播した説話が、それぞれの国の文化に影響を受け、中国の変容、そして日本の変容を被っていたとすれば、その変容の解明こそ、仏教学（あるいはインド学）・中国学・国文学といった狭い学問の垣根を越えて「学際的」という名にふさわしい研究となるであろうし、また他分野の研究手法をも習得した著者に、今後はそのような研究を期待したいところである。

なお、本書は上記の八章以外に、付篇一として、第八章の大施太子本生譚と関連する『サンガベータ・ヴァストウ』所収の「カ

リヤーナカーリン・ジャータカ」の日本語訳、また付篇二として著者の留学体験を綴ったオックスフォード体験記、さらに巻末には本書の英文要旨が載せられている。付篇二はこれからの若い研究者にとってよい刺激になるであろうし、また英文要旨も日本の研究の成果を海外に積極的に発信していく上で必須であろう。本書が機縁となり、よい意味でこの分野での学際的・横断的な研究が促進されることを強く望む次第である。

(汲古書院 二〇〇八年二月 二一八頁＋二二頁 本体価格六、〇〇〇円)

(ひらおか・さとし 京都文教大学教授)